地域学習シート

菅浦を守った人たち

現在私たちが暮らす地域は、先祖たちが一生懸命に守ってきた上にあります。ここでは長浜市西浅井町菅浦を例に、中世の人々がどのように地域を守ってきたのかを見ていきます。一つ注意してほしいのは、決して菅浦が特別な場所ではないということです。皆さんの住む場所でも、菅浦と同じように村人たちが戦いムラを守ってきたのです。そのような歴史があったことをぜひ知ってほしいと思います。

長浜市文化財保護センター

なぞだらけ?! 中世のくらし

みなさんは中世（鎌倉時代・南北朝時代・室町時代）と聞いて何を想像しますか?

北条時宗や南北朝の戦い、応仁の乱、東山文化・・・。武士や貴族のことはよく学校でも教えてもらいますが、普通の人たちがどのように暮らしていたのかはあまりわからないですよね。

そんな謎(なぞ)の多い中世の資料がたくさん発見された所が長浜市にあります。それは菅浦というびわ湖の北にある小さなムラでした。

約100年前、若き歴史学者が菅浦に!!

菅浦はびわ湖と山にすっぽりと囲まれたムラです。昔は山道を歩くか舟でしか行くことのできない場所でした。

菅浦には「開(あ)けずの箱」と呼ばれる一つの箱が伝わっていました。

約100年前、その箱の存在を知った京都帝国大学（現在の京都大学）の若い歴史学者が菅浦にやってきました。

上／菅浦の景色。下／集落の端に建つ四足門。昔は四か所に建てられていたといわれているが、現在は二か所だけ残されている。

菅浦文書とは

中世のなぞを解くカギが菅浦に!!

学者は菅浦の人たちの協力を得て、その箱の中に入っている文書を調べることにしました。長い間謎に包まれた箱を開けると、なかには1200通以上のたくさんの文書が入っていました。

これがのちに日本史の謎を解く「菅浦文書」の発見でした。

菅浦文書の多くは鎌倉時代から安土桃山時代にかけての大変古い時代のものです。これだけ古い記録がまとまって見つかるだけでも珍しいことですが、それ以上に菅浦文書が菅浦の人々、つまり庶民によって書かれていたことが、何よりも珍しい点です。古い文書は、普通政治をおこなう役人や武士、天皇家に仕える人、お坊さんによって書かれたものが多いのです。

菅浦文書の発見で、それまで知ることのできなかった中世庶民の暮らしが一気にわかるようになりました。

では、菅浦文書に何が書かれていたか見ていきましょう。

菅浦の支配と人々

中世の菅浦の人たちは、京の朝廷や大津にある大きな寺院や神社に支配され年貢を納めなければなりませんでした。

なぜ、このようにたくさんの所に年貢を納めなければならなかったのでしょうか。

理由のひとつに、朝廷や寺社に年貢を納めると、びわ湖を自由に行き来したり魚をとることができたことが挙げられます。また、他のムラと争いごとがあった時にも助けてもらうことができます。菅浦の人たちは朝廷や寺社の力を利用してムラを守っていたのです。

＊1 日吉大社は大津市坂本にある神社。京の都から見ると鬼門（鬼が出入りする方角）に当たることから厄除けの神社として大事にされた。また延暦寺の守護神でもある。

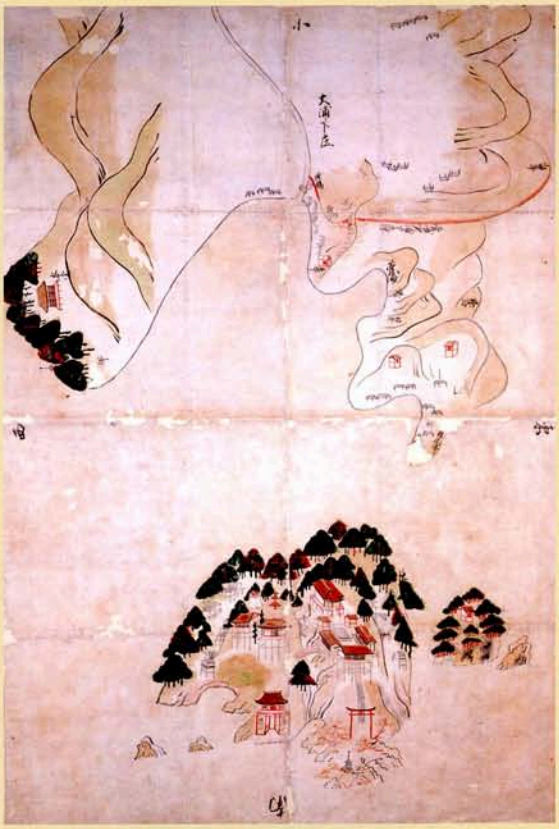
菅浦の自治
ムラのことは村人で決める

朝廷や寺社などの権力者は年貢を受け取るだけで、菅浦の人々の暮らし方に対してあまり口出ししませんでした。

生活する上でのルールは村人同士でつくりました。ルールを破った人や罪を犯した人へ、村人が罰を与えることもありました。また、ほかのムラとの争いごとがあれば、菅浦は団結して立ち向かいました。さらに村人たちは一緒に港や山などを所有し管理をしていました。

村人がルールをつくり、裁判所や警察署の役割をもち、共有の財産を持つようなムラを惣村（そうそん）といいます。このようなムラは近畿地方を中心にみられ、菅浦はその代表的な場所です。

菅浦の争い
ムラを守った人々



菅浦与大浦下庄堺絵図（須賀神社所有　滋賀大学経済学部附属史料館保管）。1340年代、大浦との境相論のときに作成したとされる。朱線は大浦との境界を示している。

菅浦と大浦の間に日指・諸河と呼ばれる場所がある。そこで菅浦の人々は田畑をつくってきた。朱線は現在の菅浦の範囲。

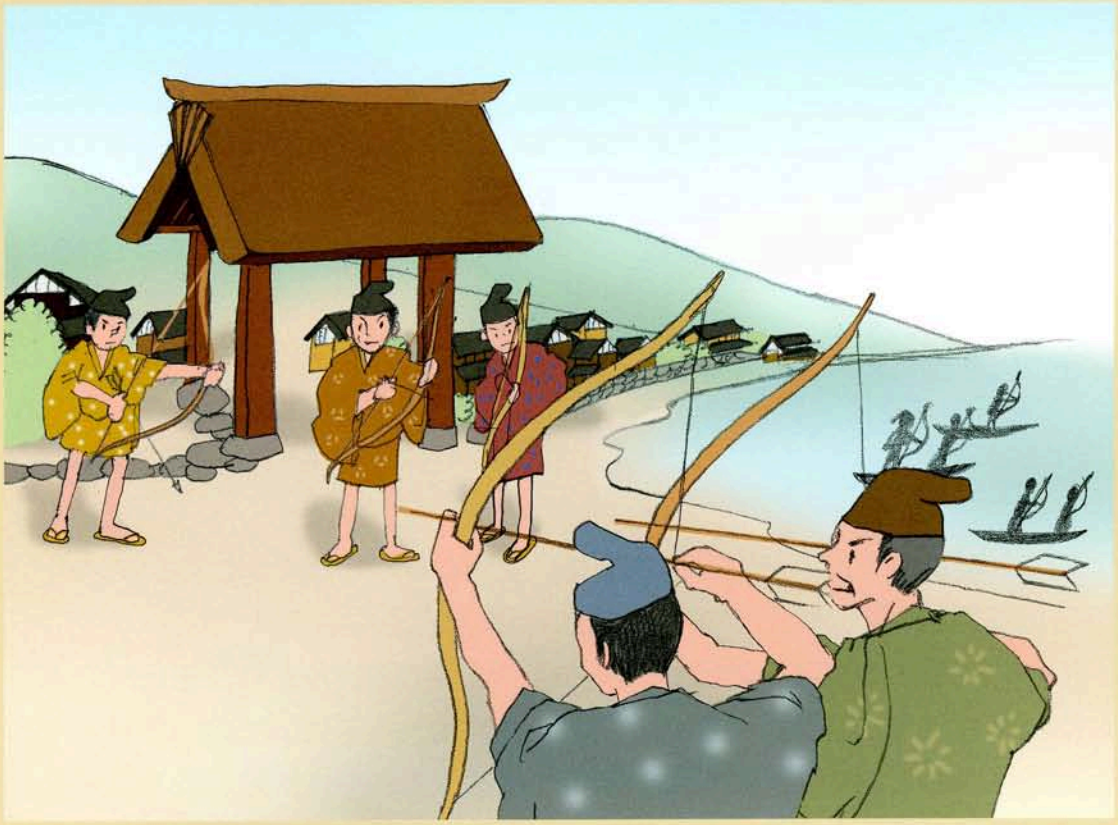
菅浦はもともと隣にある大浦荘（荘：貴族・有力寺社の私有地）の一部でしたが、鎌倉時代になると大浦から独立しはじめます。この時問題になったのが、大浦と菅浦の間の日指（ひさし）・諸河（もろかわ）と呼ばれる（現在は、「ひさしで」・「もろこ」と呼ばれる）場所にある田畑でした。

菅浦は田畑にできる平らな土地がわりと少ないです。食べるため、年貢[*2]を納めるためには日指・諸河の田畑が必要でした。

そこで菅浦は、日指・諸河の田畑を得るために、実にさまざまな戦い方をしました。

＊2　たとえば、1335年（建武2）の菅浦の朝廷への供御（くご）（年貢）は麦・大豆・鯉・ビワで、米はふくまれていません。

菅浦の争い
ムラを守った人々



1295年（永仁3）、菅浦は、日指・諸河を自分たちのものだと主張し、無理やり稲を刈り取りました。ここから約150年間、菅浦と大浦は日指・諸河をめぐって争いを続けました。

菅浦は比叡山檀那院や日吉大社など、大きな寺社の力を借りて裁判を起こしました。菅浦は裁判に負けた時もありましたがあきらめません。時には舟や麦をうばい合ったり、合戦も起こりました。争いが激しさを増すなか、1446年（文安3）に室町幕府が日指・諸河は菅浦のものにするようにと命令を出しました。翌年大浦側もこれを認め、日指・諸河は菅浦のものになりました。

菅浦では争いに勝つために住民が強く団結しました。びわ湖の北にある100戸前後のムラでしたが、湖を通じて大津などにある有力寺社と結びつき、その力を利用してたくましく生きぬいたのです。

その後の菅浦

大浦との争いののち、菅浦は平和に暮らしていましたが、時は戦国時代、徐々に周囲の戦乱に巻きこまれていきます。湖北では戦国武将の浅井氏が力をつけ、大永5年(1525)頃には菅浦を含む湖北地方を支配するようになりました。

菅浦も戦で使う舟やお金を徴収され、生活が苦しくなりました。菅浦では現在も浅井氏に苦しめられたという言い伝えが残っているほどです。

舟やお金だけではありません。浅井氏は菅浦のルールにも口を出してきました。菅浦がこれまでどおり、村人のなかでルールを破った者へ罰を与えると、浅井氏がそれに反対したりするようになりました。次第に菅浦は浅井氏の意見に従わざるを得なくなりました。つまり、菅浦は自分たちのムラのことを自分たちで決められなくなっていったのです。浅井氏はこれまで支配していた日吉大社や朝廷とはまったく違った仕方で支配をしました。菅浦から裁判所や警察署の役割を奪い、自分たちの言いなりにしたのです。

浅井氏が滅亡したあとは豊臣秀吉、そして江戸時代になると膳所藩が菅浦を支配するようになりました。菅浦には代官と呼ばれる膳所藩が任命した役人が置かれました。ただ、菅浦の人たちは自分たちのムラは自分たちで守るという自立の精神をその後も根強く持ちつづけました。中世から引き継がれた中老衆と呼ばれる菅浦の独自の組織が中心となって代官と対立したり、近隣のムラとの土地争いをするなど、菅浦を豊かにするために、戦いつづけました。

編集・発行：長浜市教育委員会 文化財保護センター
〒526-0802 滋賀県長浜市東上坂町981番地　TEL 0749-64-0395　FAX 0749-62-6357
発行月　平成25年3 月
平成24年度 長浜市文化的景観保存活用整備事業